

ると、他國の思想はドン／＼入り込んで来て、それが發展の素因となると共に、又大なる弊害も伴つて來るのである。何事にも一利一害は到底免れないことで、やゝともすると思想上の微菌に犯される。即ち、悉く今までの國家を破壊しやうとする無政府主義などは、最も猛烈な微菌である。

元來微菌といふものは、微力なものであるけれど、虚を衝いて不意に箱から險呑である。僅か顯微鏡の下でやうやく其の形を知ることの出来る微菌でも、大なる人間を倒すのは誠に易々たるものである。年々世界中の人間が、ペストだとか虎列刺だとか肺病菌や、其他多種の微菌のために、食ひ殺される人間は實に莫大な數であらうと思はれる。これ等の微菌を驅除するには、色々の方法があるけれど、先づ驅除の方法に先つて、各自に健全なる身體を

作り上げて置くことである。健全な身體でありさへすれば、たとへ微菌を呑み込んで、苦味い胃液は忽ち彼等を殺してしまうことが出来るのである。これと同じく、思想上に於ける微菌も、健全なる思想さへ持つて居れば、如何に猛烈な微菌でもすぐ殺してしまつて、即ち其の喜を取り悪きを捨て、益々發展の域に達することが出来るのである。

現在の青年は、家に財あれば肉慾を恣にし家に財なければ
生活難を嘆じ、絶へて國家の如何を考へず。

——(日本及日本人)——

195
悉く今日の青年が墮落淫逸であるとは言へないが、概して財産家の子弟は財あるに任せて淫樂をこれ事とするものが多いのは、恐らく拒むことの出来

ない事實である。又財のない、所謂貧賤の家の子弟は、財を求めることが急で、然かも得ることがなかく、困難であるから、従つて生活難を叫ぶやうな順序になつてくる。

年々世が進むにつれて、生活の程度が高くなるから、勢ひ生活難も起るのであらうけれど、健康體を有する青年が、生活難を叫ぶといふのは、畢竟生活の程度を誤つて居るからである。己れを知らないから起るので、自己の分に處し。境遇に處して行けば、決して生活難のあらう筈はない。

やがては國家の重大なる責を負つて立つべき筈の今日の青年が、財あるに任せて淫樂を事とし、財なきは生活難に泣いてゐては、國家の前途實に憂ふべきではないか。

と言つて、故らに今日の青年をとらへて、政治運動をしるといふのではない、業務に妨げのないかぎりには、演説もやつて見、討論もして見、筆戦を試みるのは、大なる利益があるのである。たとへ、其の名論卓説を吐かぬまでも、國家を思ふの念があるだけでも充分である。

國民思想が頹敗して、忠君愛國を滑稽視して居るのを救ふには、今日の青年に政治思想を持たせ、且つ元老と稱する人々の私財を、公共事業に捨てさせるの外はない。晩から早かれ列國の趨勢に刺戟せられて、如何しても奮起しなければならぬ時代が來るだらうけれど、それに先んじて列強に當らんとするには豫め準備が必要である。

禮は義務心よりし、詔は奴隸根性よりす。

同じ従ふといふ事でも、義務と心得て従ふのと、對手が強者であるが故に或は従がへば自己を利するからと、奴隸的の根性から打算して服従するのは、天地宵壤の差があるといはなければならぬ。孔子は「禮して諂ひすと疑はる」と曰つて居るが、禮と諂とは勿論大なる差がある。

義務心は、人として美德の根本であるから、決して須臾も離れることの出来ぬものであるが、之れに反して、奴隸根性がなければいけないだけ、人の品性は高くなるのである。

彼の牛馬が、炎熱の下を追ひ使はれて、唯々として務めて居るなどは、無能無力の人間に比して優ることが幾倍かしのれない、然るに無能無力の人にも

劣るとせられるのは、單に形が畜生であるからではない。その服従が、義務心からではなくつて、鞭撻を恐れる奴隸的根性であるからである。尤も、時には牛馬にも義務心と認むべき事が無いでもない。戰場などで、負傷した主人を助けるとか、主人の危急を人に知らせるとか、驚くほご事實が往々あるこれ等は、確かに義務心のない奴隸根性の人間より、遙かに優つて居るのである。

永久より考ふれば、何ぞ必ずしも將來を念とすべけんや、

況んや區々の現代式をや。

—(實業之世界)—

現代といふ語が盛んに流行的に用ひられて、これを口にしないものは時代

後れ、口にするものは時代の卒先者であるかのやうに心得て、現代式といひ現代的といひ、盛んに濫用するの傾がある。

現代式といふのは、以前流行した當世流といふ語ほど強い意味はないが、又ハイカラといふほご嘲弄の意味もない。尤もハイカラよりは稍や根底がある。是れが現代式だといふ物に限つて、譯もない物が多いが、之れを解して居るといふことは、まるつきり解して居ないのより遙に好い。文字の上からいふと、現代の人と言へば、今現代に存在して居る者で、現代でない物は、即ち過去に屬する者である。勿論現代とは、過去と將來とに對して、現在に存在しつゝある間をいふのであつて、例へば現代史といへば、著者が世間を知つた時から現在までの事を書いたものであるが、筆を執る時よりもそれ以

前の出來事で勿論過去の部に入つて居る。又筆を擱いた時には、筆を執つて居た間も過去になつてしまふ。斯ういふ風で、嚴密に、むづかしく言へば、現代といふものは僅かの一瞬間で、今日現代といつても明日になれば過去となるのである。

實に、現代式を誇り、現代式を悦ぶ期間は、極く短かいもので、青年の頃熱心に之れを言つて、社會的革命が近い内にあるなぞと思つて居ても、大抵三十才を過ぎると、殆んど忘れてしまふ。現代式を誇る者が、將來如何なるかといふことを考へたら、妄りに現代式を吹聴せられないだらう。

現代の物は、將來に於て如何に變化して行くか知れないのである。現在に眞理と言はれることでも、將來は如何であるか解らない。現在に勝ち誇つて

居ても、將來に於て降服しなければならぬ場合は少くない。後世恐るべしといふのは全く事實である。

けれど、此將來とても、過去現代の連続したものに過ぎないのである。過去現在未來の區別を超越してこそ始めて人は偉大なのである。現代も將來も永久の上から見ると何でもないのである。

時代思潮に屈従する勿れ。

——(想 痕)——

時代思潮といふ言葉が往々用ゐられるが、その解釋は人々によつて一定しないかも知れないが、文字の上からいふと、その時代の思想の潮流である。如何なる時代でも、思想上の潮流は必ずある。そして、人はやゝもすれば其

思潮に屈従しなければならぬと思つたり、或は屈従するのを以つて得々として居る者があるが、これは實に間違つた事である。

時代思潮に従ふのは、即ち時勢に従ふことで、己れの身を安全にするには利益がある。丁度昆虫が其の身邊の色と同じやうに自分の皮膚の色をかへて他の害を避けると同じやうに、社會の一人として、其の周圍と同じくするのは、難を免れる最好の手段で、人は皆思潮に投ぜんとして日夜致々として居るのであるが、己れ一身の保全のみを計らないで、己れの言はんとする所は何所までも言ひ、行はんとする所は何所までも行ふ勇氣があれば、周圍などに何の遠慮する必要はない。斯ういふ反抗者は思潮の進歩を促すのに最も必要なのである。

時代思潮の勢が熾んで、反抗者の頭を抑へ付ける勢力があればあるだけ、世の進歩發達を害するもので、之れに反して、時代思潮の勢力が薄弱で、然かも之れに反抗する者が多かつたなればそれだけ時代は活氣を呈して來るのである。であるから、自己の安全を思ふに急でないかぎり、務めて時代思潮に反抗して進歩を計らなければならぬ。

尤も、時代思潮に屈從しないのにも二種の原因がある。即ち一は時代より進んで居るが爲めと、一つは時代よりも後れて居るからである。語をかへていふと、頑固黨と急進黨との二種がある。頑固黨のチヨン鬪式は、要するに時代思潮なるものを充分に會得して居ないから起ること、これは各人注意しなければならぬ。

悲憤慷慨衰へて煩悶起る。

——(日本及日本人)——

悲憤慷慨口を開けば風を起し、雲を捲く底の有様は、何といつても維新前後の時代である。當時は世に成すあらんの志を抱いたものは、みな政治を念として、我こそ大臣參議にならんものと、即ち俗語にある如く『今の大臣參議は皆書生』てふ心持で、熾に勉強したものだ、愈々社會に出て見ると事實はなかくさうは行かない。己れより實力のないものでも、立派な地位にあつて威張つて居る。然かも人を採用するに、情事を以つて、知己とか紹介さかいふやふな順序を採る。實力に於て事實優つて居るものは、不平不満が胸中に鬱勃して忽ち火を吐くやうな勢で悲憤慷慨する。

然るに、議會開設の豫告が出て、憲法が發布され、文官登用の規則も出て種々の経験を積んで來たので、全く悲憤慷慨の跡は斷つた。これと反對に、新に煩悶の聲が起るやうになつた。

即ち國家的であつた思潮が、新たに社會的、或は個人的になつた證據である。

強いて性を狂ぐれば、利よりも害を來たすこと多し。

——(想 痕)——

角をためて牛を殺すとは、古い諺であるが、事實は新らしく現在の世に往行はれて居るのである。知らずく、自分では氣が付かないが、事實に於て牛を殺すやうなことは少くない。

例へば、繪の好きな小供があつて、本人は如何しても畫家になりたと思つて居るが、家庭の都合上、總領息子であるから家祖傳來の職業をしなければならぬと本人が嫌といはふが何といはふが、家業を無理に仕込んで、天性非凡の畫才を以つて居ながら、平々凡々で居るものが少くない。つい先日、某大尉の娘が、女子美術學校を退學しなければならぬやうになつたので、自殺を企てたことは、世人の耳にまだ新しい事實で、全く角を矯めて牛を殺すやうなものである。

教育の本旨は、教育勸語にもある如く『智能を啓發し徳器を成就し』とあるごとく、智識や能力を啓くのである。愚人を智人とし、惡漢を善人とするのではない。聰明な人間は教へなくつても聰明である。又不聰明な者は、幾

等教育しても不聰明である。即ち智を製造するのでなくつて、各自が持つて居る智識を、段々と増して行くのである。人よりも長じた所を、出来るだけ伸して、又悪い短所を、出来るだけ減じて行くことである。であるから、或程度までは現在の學術教育は必要であるが、それ以上は不必要だと言つても好いのである。

先づ父兄に進言して、然る後に子弟に及ばざるを得じ。

——(世の中)——

現今の學生や青年の風儀が非常に頹れて、之れが矯正を叫ぶ者が日々に多くなつた。その主張する所から察するに、改善の方法として、二ツの意見があるやうである。即ち、一ツは、今の教育は重に智育に偏して居て、德育が

缺けて居るから、従つて、智識もあり技術も人に勝れて居る者でも、品性に於て非常に劣等であるといふのと、一つは、現今青年女子の風儀が甚だしく亂れて居るが、若し一層甚だしくなつたら、終には救ふことが出来なくなるから、宜しく従來の弊習を掃して、行爲を正格にするやうにさせなければならぬといふので、兩者とも、先づ大同小異で、つまり品性を高くすれば行爲も正格になる譯である。

然し、今日の青年學生の風儀が、果して頹廢に傾きつゝあるかといふに、之れも第一疑問である。昔の漢學塾の子弟なども随分淫逸に耽つたもので、就中醫者の子弟なぞききては、實に箒にも棒にもかゝらぬのが多かつた。と言つて、昔しに淫逸な者があつたから、現今もあつて關はないといふのでは

ない。何れの世にも多少の屑はあるのだから、大に進善の道を構じなければならぬ。

で、此淫逸なる風が起るといふのも、その因つて起る所は、彼等學生自身が生み出すのでなく、他から注入されるのである。つまり他の眞似をするのである。さなくとも、人生の最も誤り易い時期であるから、赤にも青にも最も染りやすい。そして其染める原料はと言ふと、彼等の先輩や或は父兄のするこころを自然に見習つて、終に眞似をすることになるのである。

青年學生の風儀の頹廢は一日も忽にするこころは出来ない。そして、之れを充分にするには、社會全般に渡つて、改善しなければならぬ。即ち彼等の風儀が亂れる素因となるべきものを大に改善しなければならぬのである。

人の世に處する、超に進むの難きに非ず、退くも亦た難し。

——(實業之世界)——

風雲急にして、一朝事があつた時に名を揚げるのもなか／＼容易なことではないが、退いて終りを克くするといふことも亦た難しい事である。一朝事ある時には、餘り大した人物でなくつても、巧く機に投じて偉効を立てるこころは随分多い例であるが、その終りを見るに、實に哀れなのが少くない。大西郷などの進退を見ると、その一進一退はなか／＼輕々しくくない。進む時に大きいと共に、退くのも實に大きい、兵を擧げて海外に押し渡らんと、熾んに口角風雲を起したが、終に議が容れられなかつたので、斷然官を辭して故山に歸つて、犬を連れて狩獵に耽つたり、或は山野を開墾したり、又自分

で馬を飼つて肥料を擔いだりなぞ、周圍の子弟にも勸めて力をさういふことに用ひさせるやうにし、私學校を興して私財を投じて子弟の教育に務めたり數へ来れば随分あるが、斯うしてその一進一退に大なる足跡が残つて居るのである。偉人といひ英傑といひ、みなその跡には何物かが遺されて居るのである。

百年の苦樂汝自らに依れ。

——(世の中)——

支那の白樂天と云ふ詩人が女を詩つて『百年の苦樂他に依る』と云つたが女ばかりではない、今の世の中はナンでもカンでも苦樂を他に求めてゐる傾向である。

此世に生れて、誰でも苦勞をしやうとする者はない、樂がしたい、愉快に暮したい、決つてる話である。然しながら世の中は苦勞をしたくないと云つても苦勞が生ずる。樂がしたいと云つても中々樂が出来ない。何故なのであろうか。要するに苦樂を他に求めてゐるからである。金に依つて愉快を味はふと思ふから、金のない時には苦痛を感じる。美衣美食に依て快樂を得やうと思ふから美衣美食が得られぬ時は不快に感ずる。女色を漁ることに依つて樂しみを取らうとするから、もし女色を自由に漁り得ず、もしくは失戀とか云ふやうな苦痛をも感ずるやうな結果を來すのである。これではいけない、即ち快樂を他に求めるから不可いのである。苦樂は自からにある。然り、自からの心にある。百年の苦樂自からに依れ

と云ふのは即ち此の事である。金で愉快を得やうなどとは思はぬから、金が自由にならぬから云つて決して不快には感じない。女に依つて快樂を味はふと思はぬから失戀煩悶するやうなことはない。

苦樂は心の對象である。苦しいと思ふのは心の持ち方一つである。樂しいと思ふのも心の持ち方に依るのである。掌を翻がへせば雨ともなり雲ともなる。見方の如何に依つて、心の持ち方の如何に依つて、苦樂と云ふことが起るのである。百年の苦樂汝自からに依れと云ふのは、此の邊の消息を教へたものである。

不平は寶である。

——(世の中)——

不平は誰でも無くしてはならぬ寶である。然らば不平とは何であるか、現狀に満足が出来ないのである。もつと向上しやうとするのである。絶えず進むべく心がけるのである。だから不平は寶である。

不平のない者はいつも現狀に甘んじてゐるものだ。だから進歩がない。發展がない。向上がない。やがて退歩である。やがて中絶である。

然し、たゞ徒らに不平を不平として、他を恨んだり、美やんだり、妬んだりしてはいけない、左様不平は寶でも何でもない尤も完全ならぬ人間のことであるから、恨めしいこと、美やましいこと、妬ましいこと、それがないとは言はぬが、怨んで怨み通してはいけない。美んで美やみ通してはいけない。怨み損、美やみ損である。その怨みを晴らさなくてははいけない。その美やま

しい位置境遇に到達するやうに心がけなければならぬ。かくて始めて不平な人の進歩向上を助けるものである。なくてはならぬ寶である。

現狀に満足しては不可ない。境遇に壓迫されてはいけない。運命に盲従屈服しては不可ない。盛に不平を唱ふ可しである。そして不平を鞭撻して、不平を晴らさなくてはならぬ。然し、不平を晴らすと云ふのは恨みある人の家に火を付けることではない、憎いと思ふ人の頭を殴り付けることでは尙更なのである。不平を晴らすと云ふのは現狀に満足せず進歩發達を心がけることである。不満足な境遇を切り拓いて満足な境遇を作ることである。

贅澤は愉快ではない。

——(實業之世界)——

人間は愉快に日を送るがよい。不愉快な日を送り迎へするのは誰でも望ましくないことではない。然し何が愉快か、何が不愉快か、その標準はどこに置くか。

自分が自から愉快だとおもつても人が見たらさうでないかも知れぬ。當人は自から不愉快だとおもつても人は不愉快だとは思はぬことがある。酒も飲まず煙草も吸はず、聖教徒のような正しい生活は世間普通の人が見たら詰らないものかも知れないが、然し當の牧師宗教家は然も尙ほ愉快に感謝しながら日を送つてゐる。職工、労働者が汗水流して一日七八十錢の賃金を得て、晩飯の膳に安酒を飲んで陶然と酔うて歌ふのは、金に不自由のない人にはさぞ詰らなからうと思ふかも知れぬが、然し當の労働者は至樂至快、無限の味

を認めてゐるのである。

金があつて佳い肴を食ひ、美しい酒を呑み、美しい女を自由にすれば、それは愉快であらう。然し美酒佳肴も馴ればうまきはなくなる。美人も毎日そばにゐれば遂には鼻について来る。取り替えてもとり替えても限りがある。浦島太郎は龍宮城で美しい乙姫と日々夜々の酒宴に歡樂のありたけを盡したけれども、それでも尙、住の江の岸の漁夫の家の方が戀しくなつて來たではないか。

榮華を盡し、贅澤をすると云ふことは決して愉快ではない。贅澤をして愉快を感じるのはまだ人間が小さいからである。口腹耳目の慾を愉快としてゐる中は人間まだく大人物とは言へない。まだく愉快不愉快を自分の周圍

にのみ求めてゐては、決して本當の愉快を味はつたものとは言へない。本當の愉快は心の中にある。自分を離れて人の爲に盡す所に味はれるのである。

部分的に悲觀し全體に樂觀せよ。

——(日本及日本人)——

悲觀は病的であるかも知れない、然し悲觀し煩悶し、そうして改善進歩を計つて行かねばならぬのは、個人的にでも、團體的にでも、必要である。樂觀は淺薄であるかも知れぬ。然し悲觀ばかりしてゐて煩悶苦心、徒らに空しく手を束ねて處決に苦しんでゐるよりは、大に樂觀して大に働らいた方がいい。

然し樂觀悲觀も自分の一身、自分の事業にばかり關係したことで甚だ面白くない。自分の都合がいゝから樂觀し、自分の都合がうまく運ばぬから悲觀する、これでは何でもない。何にもならない。愉快だらうが不愉快だらうが他人の知つたことではない。

だから樂觀必ずしも有り難くない。悲觀必ずしも排斥すべきではない。已れさへよければ一生安樂である。世間がどうしたつて自分に影響はない。自分が安樂だから樂觀してゐると云ふのは我儘な樂觀である。それで差支ない人生ではあるけれども他人は少しも預かり知る所ではない、有りがたくはない。是に反して、自分はどうかつても構はない、たゞ國威の外に延びないのを憂ふる。世道人心の頹廢するのを心配する。如何にして内政を處理すべ

きか。如何にして外國に對すべきか。と云ふことに就て部分的には悲觀すべきことは澤山ある。この悲觀を將來の希望につないで、そうして改善進歩に努力し、内政外交の手段方法を講ずるのは全體に於て樂觀である。

國家さはいはず、個人の事業といはず、部分部分の惡弊損害といふやうなことは悲觀して、之を改善するに努めるのは、全體に於て、國家個人の盛大を豫期した樂觀であると思ふ。

國家にも個人にも、悲觀すべき困難はどんくある。然も困難が多くして漸次發展向上の域に進むのは當然の理でもあるし又しかと努めなければならぬ。だから部分的には悲觀しても、全體に於ては樂觀すべきである。部分的の悲觀の材料を驅逐して、全體的の樂觀の域に進むべく努めなければならぬ。

損になることはしない方がよい。

—(實業之世界)—

今日の社會には女郎買をする獨身の青年を非難するの權利はない。これを制止する法律もない。然し、青年は出來うる限り情慾を節してかう云ふ不潔な場所に近づかぬやうにしなければ損である。損なことはしない方がよろしい。

長いものには捲かれると云ふ、泣く子と地頭には勝たれぬと云ふ、むやみに我は顔して出しやばるのは損である。損なことはしない方がよろしい。

力もないのに自分の意地を徹さうとする。力があつても時も場合も考へずに自分の意地を通さうとする。遣り損へば笑はれる。遣り得た所でよくは言

はれぬ。損である。損なことはしない方がよろしい。

朝寝をするのは損である。大酒を飲むのは損である。賭博に耽るのは損である。女に溺れるのは損である。損なことはしない方がよろしい。

煙草を飲めば呼吸器を痛める。損であると思つたら爲さぬがいい。呼吸器を痛めてもそのうまさには代えられないと云ふならば、敢て禁煙せなくもよい。酒もさうである。女もさうである。損があつても、その快樂を味はふ時の心持ちのよさには代えられないと云ふならば、敢て禁酒、禁煙、禁色などと四角ばらなくもよい。

誰も自からスキ好んで損をするのではない。損なことはせぬがよいと云ふことは誰でも先刻承知の話である。然も尙、損としりつゝ爲さねばならぬ場

合もあるかつて、世話になつた人が零落して助けを請ふたのに、損をするからせぬ云ふのは人情ではない。戦争に出る。國家のためだと云つたからとて、自分の生命を捨てるのは損だからと云ふ者はあるまい。

損なことはせぬがよい。然し時と場合とを考へなければならぬ。

元氣ある者は勝者たり得べし。

——(實業之世界)——

人間、何をするにも元氣がなくなつては駄目である。相撲なんぞを見ると、もう一月も前から今年は彼奴は元氣がある……と新聞に書かれるやうなのがきつと成績がいゝ。元氣は、人間の成功不成功のペロメートルである。

元氣のある者には、その周圍が引ずられてその成功を助けるやうになる者

だ。あいつはいつも元氣がいゝ、ちつとも悲觀してゐない。氣持のいゝ男である。資本を供給してやらう、新智識を與へてやらう……と云ふやうなことになるものだ。火事の時などによく耳にする例だが、弱い女が、平常はとも動かすことの出来ぬ重い荷物を平然として背負つて出る。一生懸命の元氣である。元氣ある者は必ず何事をか爲しえられるのは、これを以ても察するここが出来ると思ふ。

元氣は自己の力を信ずることに依つて生ずる。何の糞！こんなことが出来なくつて如何するものかと、一生懸命になつて見玉へ、世の中に出來ない者はない。聖人が志のある所に必ず道ありと云つたのは此の謂である。

元氣のない者には何ごとも爲し得ない。あいつは厭に青い顔をしてゐる。

いつも元氣が無いちやないか、あんな奴に何が出来るもんか云つたやうな譯で、職業の紹介を頼まれても力をいれて世話をしやうとする者はない。況して資本を出して一と働らさせやうなごご云ふものゝ有る譯がない。従つて一生不遇、碌々として世を終るのである。

元氣を出せ、元氣を出せ、北條時宗の元氣はついに、十萬の元軍を水の泡と消えさせたではないか。秀吉の元氣はついに草履取から關白にまでなつたではないか。元氣なるかな、元氣なるかな、元氣のある者は何でも遣り遂げることが出来る。

天地は悉く力である。

——(日本及日本人)——

柳は緑、花は紅、夏は暑く冬は寒く、秋の月の色、紅葉の錦、たゞ偶然にあるのではない。みなこれ天地の力の現はれたものであると思ふ。

人に財産の力がある。然し、親の遺産を相続したのでも、自分の努力勤勉から作りあげたのでも、その根原は何であるか、その財産となる土地山林田畑邸宅、乃至は會社事業銀行業、その根本をたづねれば何れかこの天地の力でない者はない。

人に學問の力がある。中學から大學と順序よく勉強して得た力もある。小學校を出たばかりの學歴で、其後は獨學で得た力もある。然し、文學、哲學、醫學、理化學、工學、そんな學術技藝でも、その根原は天地の力である。天地の力を學んで得たのである。

天地は力である。花の咲くのも實を結ぶのも、雨がふるのも雪が降るのもみなすべて天地の力である。紡績事業、鑛山業、貿易業、其他一切の實業もみなすべて天地の力に人爲を加えたものである。法律經濟の學問、文學哲學醫學理化學等の學問も又然りである。

天地の力は、直ちに人のものと爲し得るのである。努力と、勤勉とを以てその獲得に従ふ者には公平に分配されるのである。少年も、青年も、老年も男も、女も、外國人も、日本人も、誰彼の差別はないのである。唯働く者に與へられるのである。多く働くものは多く得、少なく働くものは少く得、實業を志さずものは財力をとり、學術に志さず者は學力を得る。誰でも、遠慮なく天地の力を自分のものとなすべきである。これ即ち人間の天職である。

働け。働け！ 一生懸命に働け。

さうだ、天地は悉く力だ！

物を弄そぶには宜しく志を失はぬ範圍に於てすべし。

——(日本及日本人)——

故の辯護士代議士櫻井一久氏は、借金もしたり、藝者遊びもしたり、酒も随分と飲んだが、然し其の爲めに自分の職業を疎かにしたことはなかつた。どんなに生體なく酔つてゐても裁判所に出る時はガバと起きて出かけて、法廷での辯論は理論透徹少しも亂れた様はなかつた。

故の伊藤博文公は漁色で有名である。けれども、本當は始終そばに女を置いた云ふだけで、その女と騒いで暮した云ふ譯ではなかつた。坐つてゐ

ても種々何か用事をしてゐた。その間にちよい／＼女に戯むれる。ちよつと我々が煙草一服と云ふ場合である。或一人の女に溺れて、それが爲に政務の澁滞を來したさか、女の巧言令色にきいて天下國家を誤まるとか、自分を忘れて仕舞ふさ云ふことは無かつた。して見ると伊藤公の漁色は世間の所謂女狂ひとも異つてゐるし、昔の御家騒動式も意味がちがつてゐたやうである。櫻井氏にしる、伊藤公にしる、物を弄そんでもその志を失はなかつたものである。

耽つてはいけない。溺れてはいけない。圍碁に夢中になると親の死に目にも逢はぬと云ふが、それではいけないのである。遊ぶべき時と、努むべき時とが、割然と區別がついてゐなければならぬ。

玩物喪志と云ふ、弄物必ずしも悪くはない。詩歌俳句、琴三味線、自分の本業の外の趣味と云ふものは誰にもあつて欲しい。然し志を失ふまでに一生懸命になつてはならぬ。本職を忘れる程はまり込んでゐてはならぬ。道樂が過ぎてはならぬと云ふのである。趣味道樂は大に鼓吹すべしである。それを趣味道樂として味はつてゐる程度で……

功名心が無いのは向上心がないのだ。

——(實業之世界)——

功名心とはエラクならうと云ふのである。エラクなつて如何するか、餘計な心配ではないが、普通に飲食に困らずに暮して行ければいゝではないか……と云ふが、然し人間誰でもエラクなりたい。車夫でも、馬丁でも、電車

の運轉手でも、職工でも商店の丁稚小僧でも誰でも今よりはエラク成りたいと思つて居る。教員、官吏、會社員、誰でも現状よりはエラクなりたいと思ふ。それが即ち功名心である。

世の中は絶えず進歩してゐる。絶えず發展してゐる。絶えず活動してゐる。此の世の中に處してエラクならうと思はぬならば、それは老人か、病人か、もしくは頗る意氣地のない者である。世の中は、是等のエラク成らうと心懸ける者に依つて進歩を促し發達を助ける。

誰でもいゝ、エラクならうと云ふのは結構なことである。望ましいことである。喜ばしいことである。エラクなつて貰はなければ困る。どうでもいゝエラクならなくもいゝと、スマしてゐられては困る。それでは社會の進歩が

止る。社會の發達が絶える。誰にでもエラクなつて戴きたいのである。

だから功名心のないのは困る。エラクなつても詰らないではないかと、すつかり悟つた仙人のやうな氣持では困る。この列國競争の烈しい時代に、仙人ぶつて悟つてゐたのでは國家の益には立たない。相應に年を取り、働きの鈍つた者は、老人の冷水で、退いて餘生を送つた方がいゝけれども、働き盛りの若い者はエラクならうと云ふ功名心がなくては困る。エラクならうとすれば、自然、事々物々の進歩がある。向上がある。どうか我々いつでも功名心に驅られて、そうして少しでも世の中の向上と、延いては自分の身の進歩に努めたい。

鬼は己れの心で作る。

渡る世間に鬼はないといふ古諺もあれば、人を見たら泥棒と思へと云ふ言葉もある。何れが社會の眞相であらうかと云へば、さちらも偽ではない。何れでも一面の眞理はある。が、然しながら、人は誰でも自分自からを悪人だとは思つてゐない如く、他人も又決して悪人ではない。世間には鬼はないと見る方がよい。

世間の人は泥棒だ、悪人だと決めてかゝつて交際するのは損である。疑心暗鬼を生ずと云ふ。心に疑を以て見れば、ドンナものでも、如何なることでも、悪人らしく、鬼らしく見えるものである。自然、従つて世間でも自分に對してよく思ふ筈がない。茲に於てか、自から鬼を作り、悪人をこしらへ

るやうなものだ。

それと反對に、人は決して鬼ではない。人はすべて善人であると云ふつもりでゐたら果して如何か、どんな悪人でも、どんなに敵意を抱いてゐても、此方から善意を以て交際つて行つたなら、長い月日の間には、いつか敵意もうすらぎ、悪意も失せて、本當の善人とならぬことはない。これは、基督教や佛教徒などの信仰談にもよく聞く話で、つまり申せば悪人を善人化し、鬼を人間化したものである。

こんなことから考へると、鬼は己れの心で作ると云ふのは眞實である。己れの心が鬼だから人も鬼に見えるのである。己れの心が悪いから人も悪人に見えるのである。要は己れの心持ちにある。

男子門を出つれば七人の敵ありだとか、人を見れば泥棒と思へとか、さう云ふ考へで何事にも疑心暗鬼を抱いて、ビクビク世渡りするのは損である。いつでも、誰でも、善人だとおもつて愉快に、安心して生活する方がどれだけいいか知れぬ。

大人物とは身を以て同胞國民に委ねるにある。

——(世の中)——

大人物とは何であるか、千萬の財産を作つたものであらうか、大臣大將となつたものであらうか、大事業をなしとけた者であらうか、俄かに斷定するのはむづかしいが、記者は先生に同じで、身を以て同胞國民に委ねた者であると云ひたい。

大人物の事に志すや、一身一家の榮辱を顧みない、財産を作るのも國家のためである。學を講ずるも國家のためである。政治家となり、官吏となり直接國務の局にあたる者は勿論いふ迄もない。唯、それが、己れの利益のためであるか。國家のためであるか。己れの名譽のためであるか。國民のためであるか。茲に人物の大と小とを計る標準があるのである。

ドンなに大事業を爲した人であつても、大臣大將となつた人でも、巨萬の富を造つた人でも、前述のやうに、その志す所が、天下國家に懸つてゐないならば、其の人は決して大人物を以て稱する譯には行かぬ。

早い話が、足利尊氏は征夷大將軍となつて天下に號令したけれども、大人物としての國家國民の崇拜は、その敵手にして戰敗者たる楠正成公に及ば

ぬ。寺内は内閣総理大臣で元帥大将である、然しながら、誰か彼を大人物とする者ぞ。城山に敗北した大西郷、明治天皇奉葬の日に自刃した乃木大将が大人物として千萬世に傳へられるのは何の爲であるか。今更の説明を要せず分り切つた話である。

車夫、馬丁は申すに及ばず、記者、小商人、教師、どんな商賣をしてゐても、その志ざす所が天下の爲に云ふ自覺のある者は、大人物として許し得られると思ふ。

決断は私利を去るより生ず。

——(日本及日本人)——

何をするにも決断と云ふことは大切な事である。物を爲すに當つて決断の

ない者は決して大事を遂行し得ない。

然し、決断と盲断を誤つてはならぬ。盲滅法に進んだのでは何にもならぬ。然し、多くは決断出来ないで迷ふやうである。なるだけ損をしないように考へる。くよくくと考へてる内に機會が去る。日が経つ。ついに折角の事業がうまく運ばないやうな羽目になる。云ふのは間々耳にする。

ある目的を達するため、ある一事業を遂行するため、それにはある者を損をする覺悟がなくてはならぬ。ある一事業の方は捨てても、他の大事業の方で利得を見る。さう云ふ考へが必要である。一方永遠の利益のためには、目前少々の損害を敢て苦痛としない。

たとへば酒を飲んで悪いと云ふのは、誰に言はれなくつても分り切つた

話である。而も目前一時の快樂のために中々禁酒が出来ぬ。女に溺れたり、賭博に耽つたりするものも、又同じやうな理窟である。そして遂には一身一家をも誤り、國家國民をも害なふやうな結果になるものだ。

だから、誰でも、目前少々の損害はあつても、永遠無限の利益をこるやうに心がけたいものである。

一身上のことに就てもさうであるが、國家國民の利害に關すると云ふやうな場合には、私利を捨てなければ、その國家の利益になると云ふ大事業の遂行はむづかしいものである。賄賂と云ふ私利のために國政の運用を誤まつたり、女謁内奏のために國家の法律を曲げたりすることは、昔の英雄と呼ばれる人にも少くなかつたは事實である。決斷は私利を去るにありといふのは全

たくである。

長所短所を考へるよりも先づ努力せよ。

——(世の中)——

誰にも長所短所云ふことがある。どうせ人間世の中に處して、この烈しい生存競争場裡の勝者とならうとするには、出来るだけはその長所に向つて歩を進めるのが、安全第一の方法である。

然し、それが長所で、それが短所であらうか、中々に分りにくい。自身身のことであつても分らない。自分では長所であると思つても案外長所でないかもしれぬ。何のつまりぬことだと思つてやつてることが、或は自分の長所であるかもしれぬ。自分の長所は何であらう、その長所に向つて生活の

歩を進めやう。さうおもつて醫學にも志さず、文學にも志さず、化學、數學、語學、何でもかでもやつて見るが、思はしくない。一生碌々として絶えるのは馬鹿々々しい話である。

自分には商人が適してゐるだらうか、それとも教師だらうか、會社員だらうか、官吏だらうか、とやかく案じわづらつてゐては何にもならぬ。日は人を俟たずに過ぎ去つて終ふ。年をとつてからでは如何なる長所を悟りえた所で、爲し得る所は知れたものである。

要するに、思ひ立つたことをやり遂やうと決心して勉強するのが一番である。思ひ立つたところが、長所なこともあれば短所なこともあるかもしれない。しかしそれを考へてゐてグズ／＼してゐては際限がない、長く考へてゐた所

で分るものではない。こにかくやる。努力してやる。或は進歩の遅いことがあるかも知れぬが、そして又損をすることもあるであらうが、結局は長所を發揮しえられる。長くやつてゐた事が即ち長所になる。

長所短所は一寸のこゝで分らぬ。思ひ立つたことは努力すべしである。努力しないで分るやうな長所は決して長所ではない。短所を以て努力するのも決して悪くはない。

適材適所は必ずしも世の爲ならず。

——(世の中)——

適材を適所にをくと云ふことがある。左様しなければならぬ者のやうに考へられてゐるけれども、適材が適所にゐるのが必ずしも世のためではない。

適材が適所にゐれば、成る程仕事は都合よく運ぶ。會社でも銀行でも、その他の事業にしても、官省にしても、何の面倒も何の滯滞もなく事務が進捗して行くであらう。けれどもそれでは面白くない。餘り物事のキチンキチンと決つてしまふのは趣きがない。

適材が適所にゐないから、世の中には不平も起るのである。そして進歩があり發達があるのである。初めから適材が適所におさまつてゐたら、世の中は無味乾燥、進歩も向上もない。唯ありの儘の原始時代を見るやうであらう。多少不適當なものがあつてこそ、新陳代謝も行はれるのである。肉ばかりでなく、茶や澤庵が入るので胃の働きが健全になる。

百姓の子が百姓で終り、官吏の子が官吏で終り、坊主は坊主、醫者は醫者。教師は教師で終るものならば、世の中は何とつまらないものであらうか。土方の子が發奮して大臣大將にならうとするので、世の中に波瀾が生じ趣味が出来る。商人の子が學問に志さすので世間が面白くなる。ならぬものを成らせやうと努力する故に於て、社會は進歩して来る。人間は向上して来る。それが人生の真相である。

適材を適所になくと云ふのは古いことばである。適材は適所になくもない。適材が適所にゐないからこそ、世間に失敗だの何だのと云ふことがあつて、新陳代謝が行はれて、自然淘汰が行はれて、世の中が一步一步向上の域に進んで来るのだ。

だから、適材適所、必ずしも世の爲にならぬと云つたのは、此の謂である

使をして要領を得ずに歸る者は望みがない。

——(世の中)——

支那の聖人は、四方に使用して君命を辱しめざることを、人間の價値を定める大事な標準としてゐる。

子供の使ひのやうだと云ふのは、使に行つても要領を得ないで歸るのを譏つた言葉である。使に行つて唯かへつて來ては仕方がない。子供でも、女でもなくつてそんな調子では全たく仕方がない。

だから用事は要領を得なくつてはならぬ。不得要領ご云ふこともあつて、これが必要な場合もある。たとへば借金取に來られた時とか、何か不始末をした時など、ちよつと、その不得要領をよいとする時もあるが、然しながら

すべての場合に於て要領を得るのは悪いことではない。

用事は必ず是を果さなくつてはならぬ。不得要領で終らせてはならぬ。如何なる場合でも爲すべき仕事はきつとなし遂げる。目的は必ず達すと云ふ者は實に重寶である。唯に商店會社、もしくは個人に使用される者ばかりではない。自分自身の事業の上に於ても、必ず爲し遂げると云ふことは望ましいことである。

今日の外交は要領を得ないのを以てよろしいとしてゐる。對外關係に於ては、國家としても、個人としても、要領を得させぬやうにするのを利益としてゐる場合が多い。然し、それとはちがふ。まづ多くの場合、要領を得ぬ者は望みがない。對外關係に於て、要領を得させぬのは、即ち要領を得た

のだとも考へられるではないか。

支那の先王の時代から、日本の今日の時代に於てまでも、四方に使用して君命を辱しめず、即ち、要領を得てかへると云ふのは大切なことである。人を使ふに當つて、もし要領を得ずにかへるならば、其の人の前途はまつたく見込みのない者といはねばならぬ。

人の犠牲になるを厭はぬ所に人氣がある。

——(世の中)——

あの人は人氣があると云ふ。あいつは人氣がないと云ふ。人氣と云ふのは徳望であらうけれども、それがどうしてある人にはあつて、ある人には無いのであらう。

乃木大將は、旅順攻圍軍の總司令官として、幾多の苦い失敗をした。そして澤山の兵士を殺した。けれども人に怨まれないばかりでなく、日本第一の人氣を集めてゐる。位勳から云つたら、山縣公よりも桂公よりも、更に寺内よりも下にゐる。然し山縣桂寺内以上の人氣を得て、死しても尙社會の崇拜を得てゐるのは何であらうか。

山縣も桂も、寺内も、エライには異ないが人氣がない。人氣の集まると云ふのはドウ云ふ具合であらうか。悪いことをしないばかりではいけない。人格がいゝだけでもない。自から守ること薄く、事あれば生命財産を抛うつと云ふ所に人氣の集散があるのではないか。悪いことはしなくつても、己れの安全ばかり計つてゐる者には人氣がない。

安田や大倉も實業界では、相當の財産もあつて先づ十指を屈する一人であらうけれど、澁澤男程の人氣はない。その財産を作つたのは己れのため、社會國家のためではなかつたからである。學者でも、學力は當代斯界に冠たる者があつても、その人氣は學士位にだもしかない者がある。大町桂月や、大隈侯爵などは大した學者とはいへぬけれども、他のエライ學者先生よりも人氣がある。

政治家でも、軍人でも、實業家でも、學者でも、人氣の集まる人と云ふのは、多くは、己れ一人よりも更に多くの人、廣い社會のためになるといふ所に於て一致點がある。人の犠牲になるのを厭はぬ所に人氣がある。己れの利害にのみ汲々たる者は餘り人氣はない。ないのが當然である。

機會は絶えず到來しては過ぎ去る。

——(世の中)——

機會と云ふことがある。機會は大切なものである。機會さへあれば、黃龍豈地中のものならんやと支那人は云つてゐる。項羽は『時利あらず驩逝かず』といつて、その拔山蓋世の氣力も何の爲すなきを恨んだ。大小の差別はあるけれども、機會を得た者はトン／＼拍子に成功し、機會を得ぬものはいつても失敗に苦しんでゐる。

然らば機會とは何であるか。棚から落ちるポタ餅である。中々落ちて來る者ではない。之を拾つたものは機會を得たと云ふのである。又は天佑ごもいふ。天佑を得た者は機會を得たと云ふ。天佑と云ふことは待つてゐたとて來

るものではない。棚にポタ餅があつたとした所で、手を延ばさなければ捉れるものではない。天佑はいつでもあると思つた時にある。ポタ餅はいつでも棚の上にをいてある。要するに、取らうとする者の心がけ一つである。

ガリレオはピザの塔で釣ランプの動くのを見て、ある法則を發見した。釣ランプの動くのを見たのは一つの機會を捉へたのであるけれども、然し、釣ランプの動くのは誰でも見てゐる。ニュートンは林檎の落ちるのを見て引力の理を發見した。然し林檎の落ちるのを見たのはニュートンばかりではない。そして又別段に珍らしい事實でも何でもない。

思ふに、機會は何時でも絶えず目の前に到來しては行き過ぎる。釣ランプは今も昔も動いてゐる。林檎は今も昔も熟しさへすれば落ちる。然し、それを

つかまへたのはガリレオ一人である。ニュートン一人である。機會は到來した時に捉へなければ、如何にしてもつかむことは出來ぬ。到來して過ぎ去り過ぎ去る機會はいくらもある。ナザレのイエスは野の白百合に人生の真相を悟つたではないか。

物はツブシ價の利くに限る。

——(實業之世界)——

官吏をしてゐた時は大分敏腕の評があつたが、實業界へ入つたら案外無能だと云ふ人はある。野にゐる時はすい分大抱負、大理想を唱道してゐた政治家も、一朝、局に當ると案外仕事が出来ない。理想も抱負もなく過ぎる者は澤山ある。

金の茶釜は、茶釜としてでなくつても價值がある。金其ものに價值があるからである。官吏が住んでゐても、實業家が住んでゐても、家屋そのものゝ價に變りはない。人間もさうでなくてはならぬ。甲の場所では敏腕を振つたが、乙の場合には無能だつたり、ある有力家に引立てられてゐた頃はよく働いたが、その有力者から離れてからは少しも働けぬと云ふやうでは駄目だ、甲に適しても乙にも不適當だと云ふやうな偏した力では何にもならぬ。人を離れて仕ごとの出来ぬやうな才能では駄目だ。つまり自分自身の價值がないからである。自分に實力がないからである。偽物の金だつたのである。つぎはぎだらけの見かけばかり立派な家だつたのである。ツブシが利かないのは仕方がない。

女が一生の苦樂他に依ると思はれる間、女の位置は高まらぬ。男が、事業の成敗、たゞ運不運、機會、有力者の後援、さう云ふものに依頼してゐる内、その人の本當の實力は養はれない。一切の運命を無視するのではないけれども、少くとも、如何なる場合にも實力を養成して、そして如何なる場合に處しても志さす所を爲し得るやうでありたい。

實力のある者は價值がある。價值があるからツブシが利く。何でも物はツブシが利かなくては駄目だ。運が悪いのか、機會が來ないのか、人間の成功はむしろ實力にありはすまいか。古往今來、英雄豪傑の成敗のあこを考へて見ると、實力か、運か、差別するに難くはないと思ふ。

出来ぬと思へば出来ず、出来ると思へば出来る。」

ナポレオンが自分の辭書に不可能と云ふ字はないといつたのは有名な話である。

月の世界に飛んで行くとか、一足飛びに内閣の大臣になるとか、巨萬の富を手にしぎるとか、さう云ふ夢のやうな空想的なことは出来ないけれども、まづ自分でやらうと思ふ程のことは必ず出来る。

世間に於ける通常一般の事業は、出来るか出来ないか、さう明白に判断のつかぬものが多いのである。然し出来るか出来ないか區別のつかぬ時に當つて少くとも出来ると思ふのは、事業進行上の大した力になるものである。よし出来なくつても、出来るとおもつて費やした努力と經驗とは、當人にこつ

ては實に尊とい教訓となるではないか。

もし、これと反對に、初めから出来ないと決めてしまつたら出来るものでも決して出来ることはない。見え切つた話である。そしてあの時斯うしてをけば今日の失敗はなかつたらうとか……云ふような後悔をする時がないとも限らぬ。

空想的な、あまり現實とかけ離れたことでない限り、大がいの事業はきつと出来るものと信じてやるのはいいことである。出来ない出来ないで、唯いたづらに考へるばかり、引込み思案をしてゐたのでは到底何事をも爲し得るものではない。出来る出来る、きつと出来る。ドンな困難でも、どんな障害でも、きつと凌ぎおほせて成功して見せる。男は左様云ふ元氣で事業にとり

かゝりたい。たとへ、その時は一時不成功のやうに見える事があつても、その事業遂行上に得た多くの智識は、他日何らかの場合に必ず應用が出来るのである。

出来ないとしても、前述のやうな利益があるのに、況んや、出来ると思つて出来上つたらば、その愉快は何ものにも變へられない楽しみがあるではないか。

奮發次第、努力次第。

——(世の中)——

人各々、境遇が異つてゐる。馬車に乗る人もある。自働車に乗る者もある。あるひは草鞋がけで歩くものもある。使ふ人がある。使はれる人がある。貴

賤貧富、千差萬別である。

今日有福であつても明日また有福であるとは思へぬ。今日貧乏だから何時まで貧乏ぐらしを續けて行くと限つてもゐない。昨日の富豪は今日の零落者である。今日の貧乏人は明日の大福長者である。そこが面白いのである。人は何が幸福になるか、何が不幸になるか、決して分つてはゐない。一時不幸であつても幸福になれる。一時幸福であつても不幸にならぬ譯ではない。運不運と云ふけれども記者はこれを奮發次第、努力次第と申したい。

大厦高樓から必ずしも大人物は出ない。破屋から、貧乏人が出ると決つてはゐない。大厦高樓に何不足のない家に住んでゐても、奮發がなく努力がなくたゞあるが儘でうき／＼暮してゐたらば、坐して食へば山も空しく、遂に

は素寒貧になる。その日／＼の食物さへも自由でない家に生れても、奮發次第努力次第で、財産家にも、學者にも、高位高官にも上られる。誰でもさうなる。そこが世の中の面白い所である。

運不運は、奮發次第努力次第である。誰彼の差別なく、よくもなり悪くもなる。決つてゐるようであつてはゐない。人生五十と云ふけれども、それさへ決つてはゐない。大隈侯は百二十五歳と云ふ、その百二十五歳説の侯でも近頃はメツキリ弱い。そこが面白い。

運がよくても得意になつてはいけない。益々奮發努力してその運をはなしては行かぬ。運が悪くつても悲觀してはならぬ。その悪い運をよい方へ向け直すべく一生懸命奮發すべきである。努力すべきである。

物は分り切つては面白くない。

——(世の中)——

世の中の事々物々、その本末が分り切つてゐては面白くない。

人生五十年と決つてゐたら、人間は何にもする氣にならないで、唯五十になつて死ぬのを俟つてゐるかも知れぬ。人が生れた時から死ぬまでの運命がちやんま分つてゐて、決つてゐるならば、勉強もない、努力もない、進歩、向上、ちつともない。世の中は本當に面白くない。

何時死ぬか分らぬから、衛生にも氣をつけるし、醫學も發達する、努力次第で財産家にも學者にも政治家にも成れると思ふからこそ、勉強してエラクならうとする。従つて實業が發達し學問が進み、社會が改良されて行く。さ

うなるか分らないと云ふ所に、物の價値がある。従つて物の進歩が企てられ向上發達が計畫される。國家としても、個人としても、この理屈からは外れない。

人生不可解だなんぞいつて死ぬのは馬鹿々々しい。もとく解らぬのが人生の真相なのだ。分らせやうとあせるのは愚だ。分つて終へば味もそつけない。あけてくやしき浦島の玉手箱、中には煙より外には何にもあるまいけれども、煙と知らずに珍重してあれば、寶物として通る。わかつてしまへば僅かに一道の煙でしかなかつた。馬鹿々々しい、世の中はみんなさうしたものだ。

世の中は分らぬ所に面白味がある。此の本にこう云ふことがあると分つて

ゐたら買つて見る必要はない。新聞の續きもの、小説が面白いのは、分らない明日の場面の變化が好奇心をそよるからである。分つたやうで分らぬ所があるので世の中が成り立つてゐる。泣くもよし、笑ふも咎めず、怒るのも悪くはない。分らぬのを分らせやうとあせる所に人生の面白味がある。人生よ永久に人と云ふ淺薄な動物にその奥を見せてはならない。

人間を計るは其の働きにあり。

——(世の中)——

あの人はエライと云ひ、エラくないと云ふのは何所を以て決めたらいか成功失敗は富貴の尺度で計る。何れだけか富み貴くあれば成功である。然らざれば失敗である。然し、位は人臣を極め、千億の金を抱いてゐても、世

間からは有るか無きかに見られてゐるのは何故か。官、必ずしも貴くないからである。金、必ずしもエラクはないからである。

秀吉がえらいのは關白といふ位ではなくて、關白にまで成りえたその働きである。岩崎彌太郎はその財力からいつたら世界第一ではない。然し無一文からあれだけの財産を作つたのがエライのである。ワシントンがエライのはその人間としての働きがもつともよく現はれてゐる所にある。ナポレオンは離れ島で窮死したのは失敗らしいが、彼のエライのはその自分の腕の働きを發揮したからである。西郷隆盛は僅かに陸軍大將で、然も最後には位を奪はれ城山で敗死した。然し今尙英雄といはれるのは其働きが自由に伸びてゐるからなのである。

自分の信ずる所に向つて、自分の腕の力を思ふさま働かすのが本當のエライ人である。世に名が現はれなくつても、その人は英雄として尊敬すべきである。

教師は教師としての自覺に立つて、生徒の訓育に力を盡すのがエライのである。商人は商人としてその商業に忠實なのがエライのである。職工徒弟、官吏、農夫、各、その職業とする所に努力して、幾分づゝでも國家と國民のために働くのが、本當の意味で云ふエライ人である。だから人は誰でもその努むる職業のために出来るだけ働かなければならぬ。腕の力の限りを發揮しなければならぬ。其所に本當の人間の價値が現はれるのである。私利私慾に耽つてゐる大臣や實業家に何のエライ所があるものだ。

爲さねばならぬ事を爲せ。

——(實業之世界)——

人の面相の異ふが如く人の思想も能力もちがつてゐる。みんな人でもきつと他人の及ばぬ所がある。愚人でも、その愚や及ぶ可からずとさへ云つてゐる長所を發揮すればいゝ。唯長所の何であるかは分りにくい、然し己れの見、長所も人も又さう認めることに努めればいゝ。先づ、爲さうと思ふことをする。人の運命に浮き沈みがあるのは、爲さねばならぬことをするとせぬとにある。爲さねばならぬことは誰でも爲さうでゐて中々出来ない。是非とも爲さねばならぬことを斷乎としてやる。

信長が光秀に討たれたとき、誰でも爲さねばならぬことは光秀を討つこと

であつた。然し誰れもよくなし得なかつた。一人衆に先んじて爲した秀吉が勝つた。利害よりも、得失よりも爲さねばならぬことは是非もしなければならぬ。秀吉はそれを知つてゐた。

柴田勝家でも、瀧川一益でも、信孝でも信雄でも、爲さねばならぬことを知つてゐたけれども、利害得失を考へてゐて中々に手が出なかつた。爲さうとした時はすでに秀吉が爲した後であつた。そのためにさうく秀吉に天下をとられ、彼等は自然死滅せなければならぬ運命に落ち入つたのである。

如何なる場合でも、事に大小はあるけれども、斷乎として爲すに如くはない。失敗もある。危険もある。然し、何事をも爲さずして平凡に終るよりはよろしい。萬全にして利益を得ると云ふことは少くない。如何なる場合でも

得失は必ず相伴ふ。身を捨て、こそ浮む瀬もあれと云ふのは事實である。浮ばぬこともあるかもしれぬが、それも止をえないことだ。

秀吉は、勝つても負けても、どうでも光秀を討たねばならなかつたのだ。さう云ふことは屢々ある。利害を打算しないで、唯すみやかに爲さねばならぬことをせよ。

人の運命は性分に左右さる。

——(實業之世界)——

人は生れつき、内氣なものもあれば、勝氣な性分のももある。内氣はともすると引き込み思案になり、勝氣は向ふ不見になりやすい。徐々に地歩をしめるもの、一氣可成的に地位を得るもの、處女の如きもの、脱兎の如きもの

種々様々であるが、性分と云ふものは争へない。

善くなるか、悪くなるかは、その境遇に依りその周囲の感化等にもよるが根本の性分を直すことは出来ない。三子の魂百までと云ふのは其の事である。どうも仕事はやりたいが家の事情がゆるさない。周囲の境遇がどうも自由に働かせえない……といつて嘆息する者もある。境遇にも制せられず、ドシ／＼所志を遂行してゐる者もある。怠けるものもあり、働かねばならぬといふものもある。捨鉢になるものもある。あくまで失敗と戦ひ、困難を凌いで行く者もある。然し、何れにしても性分の支配は免かれない。

この性分と云ふ奴は、眞實人の力ではごうすることも出来ない。持て生れたのである。授かつたのである。だが然し、人の運命は性分に左右されてよ

くも悪くもなるのであるから、内氣にしる勝氣にしる、いゝと信ずる所を修養練磨して助長させる工夫が肝要なことではあるまいか。

内氣には内氣の徳がある。勝氣には勝氣の利がある。一長一短、何れがよろしいとは斷言し得ないけれども、とにかくにも修養を加へ、鍛練して行くこと云ふ心がけがなくてはならぬ。さうして幾分かは性分を善化して行けば必ず得る所がある。

有爲の書を読み有爲のことに當れ。

——(日本及日本人)——

詰らぬ本を讀んではならぬ。書物は智識の寶庫である。然し、下らない書物に讀み耽つてはならぬ。讀めば必ず世を益し人を益するやうな書物でなく

てはならぬ。

奮闘だ、努力だ、活動だ……よく聞く語であるが、然し、唯徒らに奮闘した所で、それが社會に没交渉であり、自分一身の利益を主とするものであるならば、奮闘も努力も活動もなきに如かぬものである。如何云ふ事業が社會のため人のためになるか。それは書物に依つて、見聞に依つて、自然と養ひえたる智識で解釋する。

人は、廣く世界各國人の活動ぶりを見て、そして自己の奮闘の助けとなすべきである。そして他に劣らず、更に一層有益に適切に働く可きである。さう云ふ活動力を、有爲なる書物に依つて修養し、鍛練しなければならぬ。そして有爲のことに當るべきである。

人は多い。書物は多い。事業は多い。然し、有爲の士は、有爲の書物を讀んで、有爲の事に當らねばならぬ。是れ即ち最後の勝利を得る所以である。然し、書物に捉はれてはならぬ。孟子も悉く書を信せば書なきに如かずといつた。眼光紙背に徹する底の讀み方でなければならぬ。信すべきか信すべからざるか。是非善惡をしつかり判断して讀まねば、書を読んでも決して益にはたさぬ。須からく自分の事業に適應した書を読んで、業務に對する智識見聞を廣めるやうにせねばいけない。そしてそれは直ちに自分の事業の上に行かねばならない。

絶えず、倦まず、努めるのである。いゝ加減のことで世を送つてはならぬいやしくも男子と生れたならば、一言一行、ことごとくこれ世のためである

人のためである。その自覺を以て奮闘し、活動し、努力すべきである。これやがて自己のためである。

繰り返して言ふ。有爲の士を以て自ら任ずる者は、有爲の書を読み、有爲の事に當るべきである。

決断すれば猪突猛進する。

——(日本及日本人)——

機會は中々來るものではない。一度機會が來たならば全力をあげて猛進すべきである。ある機會を見付けて、猪突猛進して行く所に事業の成否がある。徒らに危ふきを犯すのは云ふに足らぬ。然し突進すべきときに突進しないで、あゝでもない。斯うでもないと考えてゐては時が移つて大事が去る。

信長は至つて注意周到、用心深くて中々危ふきには近よらなかつた。然し今川義元が大軍を以て攻め來つた時、左右みなその勢を避けて退くことを勧めた時に、一人聞かす遂に敵に向つて突進し大勝を得て勢を一變した。

ネルソンは常に、敵と對して戦ふべきか、戦ふべきでないかわからぬ時はいつも戦ふべきに決心したといつてゐる。進んでいゝか、悪いか分らぬ時は一意、突進するがよい。考へるのはよい、深く考ふべきである。出来るだけ考ふべきである。然し考へずにしては何にもならぬ。ある邊で思ひ切らねばならぬ。そして斷々乎こして行ふにある。戦争ばかりでなく、何事業を企てるに當つても必ず左様あるべき筈である。

思ひ切りが悪く、やりかけても尙躊躇逡巡してゐては何事をもなしえぬ者

だ。やりかけたら猪突である。猛進である。わき目もふらずに努めるのである。爲すべきことは斷乎として爲すべきである。何でも得のある所にはいく分の失がある。差引きして得の多いのを得策とする。猛進猪突には損失も伴ふ。亢龍悔ありともいふが、然し、世の中には猪突猛進しうる者は少ない。猪突猛進は相場のやうに一か八か投げ出すのではない。思ひ切つて仕事を初めた以上、あくまでも全力を注いで行ふことである。向ふ不見とは異ふのである。

多くの場合拙速を尙ぶ。

——(日本及日本人)——

熟慮斷行と云ふことがある。結構なことである。然し、多くの凡人は熟慮

が過ぎて大事の場合をとり逃して終ふ者だ。

無鐵砲、盲めつ法、いづれも悪いことだ。後悔先に立たずともいふが、然しあまり考へ過したら何にも出来ない。

よく人が、篤と考へてしやうとか、熟考の上とかいふが、然しさう云ふ人が果して篤き考へるか、熟考するか、それは分らない。大抵は深く考へもしないで、唯速答するのを避けるだけのやうだ。つまり速やかに判断するのを欲しないのである。慎重の態度をとると云ふけれども、結局はたゞぶらぶらに日を送つて、初めに考へた程の程度のことしか考へられないものである。いくら考へた所でない袖は振れない道理である。よし又よい考へた所でも大事は過ぎ去つて終ふやうなことがないでも無い。

考へ込まないで速断して、決行して、そしてその結果は最もよく考へたものと同じになるものだ。直覺的に判断しうるのである。けれども左様ばかりも言へない者もある。考へる。考へてやる。然し結果は同じことである。要するに人各自の天分にも依ることであるけれども、考へ込むと云ふ方は時機を逸しやすい。拙速必ずしも拙速でない。

人間普通の能力のある者ならば、大事に望んで、是非の判断の付かぬ者はない。電光石火、進むべきか退くべきか、爲すべきか爲すべからざるか、早速に判断の出来ぬ者はない。判断をのばすのは悪い習慣から來てゐることが多いやうだ。そうしてゐる内に知らず／＼考へ込んで、迷つて、煩悶して、ついに何事も爲しえないやうな結果を來すものだ。誤ちがあつてはならぬと

考へてゐると、つい過誤も生じて來るものである。我々はさうか事に當つて速断する習慣を付けたいものである。

人は部分に於て死し大體に於て生きる。

——(世の中)——

鬚を削るのはそこが部分的に死ぬのである。然し人と云ふ全體から見れば綺麗になつたと云ふことに於て、新らしく生きたのである。

人は一代名は末代だと云ふ。昔から今日まで國家のために身を犠牲にした英傑は、身體を云ふ部分の生命を捨て、名に於て後世永遠に生きたのである。生命を現世に捨て、後世末代の名を求めて生きたのである。

安樂に一生を過した者がある。幾萬と云ふ財産を積んだ。大臣にも大將に

もなつた。然しそれが自身一個の都合のいゝやうに暮して來た者は、今日、果してどれだけ人の記憶に残つてゐるだらうか。部分に生きて、全體に死んだのである。廣瀬中佐にもし自分の安樂を希つて、杉野兵曹長を捨て、願ひなかつたならば、今日國民からドレダケの崇拜を受けたであらうか。一身の危急を顧みず、部下の生死を案じたと云ふあの崇高な至情至誠が、今日軍神の名を得たる所以である。身體と云ふ部分は死んでも、名と云ふ全體は永遠に生きて、後生尙萬夫を起たしめるのである。

部分に於て死し、大體に於て生きると云ふのは、損をして得をとれと云ふのである。小さい損をして、大きい得をとると云ふのではあるまいか。然しも多くの凡人は目前の小さい利益のために、永遠の大きい利益をすてやうとし

てゐる。事を爲すに當つては、何れが是れ小利大益であるかを、よくよく考察して努めねばならない。

然しながら、損をして得をとれと云ふ考へでやるのではない。要するに私心をすて、公共的に生きると云ふのである。自分一個の幸不幸を考へてゐるのは小さい。天下國家の幸不幸を憂ふるに於て、初めて光榮あり、意義ある生活をなし得る。

毀譽褒貶は性格を鍛練する。

——(想 痕)——

よく言はれやうが、悪く言はれやうが構つたことではない、と済してゐる人もある。然し、又、人の評判を一々氣にしてゐる者もある。餘り氣にする

のも不可。左様かといつて氣にしないのも善くはない。

評判が悪いから、是をよくするやうに努力するのがいゝか、それとも又評判なんぞ何うでもいゝと言つて棄て、置くのがいゝか、人によつて考へは異なる。然し實際、人の評判ほど當にならぬものはない。それを一々氣づかつてゐては仕方がない。然し又、その評判と云ふのが中々に當つてゐないとも限らぬ。當つてゐたからつて何の、人の評判なぞを濟してゐても仕方がない。賞められれば勵みが付く。折角やつてゐるのを貶されると面白くないから怠ける。子供でも左様である。大人でも左様いふ傾向がある。偽にもせよ、賞られるのは嬉しくなくはない。たとへ本當でも貶されるのは面白くはない。評判はどうでもよくはない。人の噂さも七十五日と済してはゐられない時も

ある。よい時もあり悪い時もある。要は、その評判に依つて来る所以を考へて、改むべきは改めなければならぬ。よい所は益々助長させて行かねばならぬ。

人は性質を異にし境遇を異にする。然し毀譽褒貶に動かされぬ程のものは恐らくはない。實際社會に立つて、善くも言はれ悪くもいはれるのは、その人の性格を鍛練するのに與つて力がある。善く言ふ者にはよく言はしめ、悪く言ふ者には悪く言はしめる。然し、己れは内に顧みて、善惡是非の批評の何所から發するかを考へなければならぬ。さうしてゐる内に、不言不語の間に性格が鍛練される。自然に悟了徹底して來る。

善くも言はるべし悪くも言はるべし。

——(世の中)——

人は善くも言はれ、悪くも言はれるのがよろしい。善く言はれてばかりゐると、少し悪く言はれてもすぐに腹を立て、己れの愚を現はす。悪くばかり言はれてゐる者は、僻んでよいことをしなくなる。人の一生は波瀾重疊、一伏一起、七轉び八起きである。世間との關係が變ることに善くも言はれ悪くも言はれるのである。

生きてゐる内悪く言はれて、死して後善くいはれる者もある。西郷隆盛がさうである。英國のクロンウエルがさうである。星亨も今に尙惜しがられてゐる。子供の時に悪く言はれて成長して後善く言はれる者もある。初めに評判がよくて後に悪いのがある。勝てば官軍、負ければ賊である。十の神童二十

の才子、二十五になりや唯の人と云ふこともある。大隈侯加藤子を悪く云ふのは政友會の連中である。寺内内閣の一派である。寺内内閣を難じ政友會に反對するのは憲政會の連中である。見る所を異にし、立場を異にするに従つて、善くも言はれれば悪くも言はれる。

善く云ふのも本當である。悪く言はれるも實際である。誰が善く云ふか、何人が悪評をするか、そこを考へるのが肝要である。そして自から願みて己の善悪を辨別するがよろしい。内観内省して善を勧め悪を改めるがよろしい。善く言はれたからつて、必ずしもそれが本當ではない。悪く言はれると云つてもそれが果して實際ではない。善く言はれて高慢にならず、悪く言はれて怒らないのがいゝ。是非の判断は天地がよく知つてゐる。たゞ願くは悪いと

おもふことは一切爲さぬことである。人が善いといつても、自から信じて悪いことは爲さないがよい。人が悪いと云つても自から良いと信じたことは斷然決行するがよい。但し、その辨別を誤まらぬやうにしたいものだ。

人々各々最も善しと認むる所を爲すべし。

——(實業之世界)——

とかく世の中は儘にならぬ者である。實力があつても用ひられぬ者が多い。力も何にもない後進の者でも、權門富學の知己であるために、世にも用ひられ、人にも秀でた地位にゐる者が多い。自分だけの實力があつて、それで一生不遇に終るのは情けない——こんな考へを持つてゐる者は少くはない。

左様云ふ考へを持つのは悪くはない。然し持つたゞけではならぬ。一生不

遇に終らぬやうに努力すればよい。世間は決して盲目ばかりはるない。何時かは自分の努力が認められるものだ。自分の實力が発揮せられるものだ。然し働いても、努力しても尙かつその社長なり主人なりが認めて呉れぬならばもつと廣い所へ出て、自由に腕を振つて見るがよい。實力のある者は、力に依つて働ける。若し働けなかつたらば實力が足りないものとして更に一層奮發すべきではないか。

人は自分の最善を盡すがよい。きつと世間に認められる。一時は世に現はれなくつても永い月日にきつと光が出る。もし又認められなかつたならば、力量の足らぬ所と思つて一層努むべきである。實力ある者、努むる者、働く者は決して世間で捨てゝは置かない。

人々各々、最も善しと認むる所に力を致すべきである。力のあるだけは伸びる。伸びてさうして人にも認められ、世間にも用ひられるものである。

幸福續きの者は鈍刀の如し。

——(日本及日本人)——

人間は何時でも幸福ばかり續いては居らない。不幸だからと云つて、失敗したからと云つて、棄鉢になるのは自から禍を求めらるやうなものである。不幸は教育である。失敗は經驗である。新たに教育され、新たに經驗したる所を以て更に大に爲す所あらんとし、而してよく成し遂げれば事業を成すの實力を生じて來るものである。

幾度も失敗し、その失敗に屈せずして起き上るのは、恰かも刀を鍛えるや

うなものである。幾たびか鍛えに鍛え直して、秋水、鐵を斷つ力となるのである。よく失敗に堪える力のある者は、失敗しても挫折しても決して落膽したり、悲觀したりしない。新しい教育新しい經驗をえて、更に一層力を振起して努力する。

幸福ばかり續いた者は、鍛えざる鈍刀の如くである。形は刀であつても實際の役にはたゝぬ。失敗すれば落膽して悲觀して再び起つ能はぬ。トン／＼拍子で若い内に成功した者は一度やり損なふと、もうそれでまる潰れである。小成した者に大成功のないのはそこであると思ふ。

事業の成敗は力である。力の根原は意志である。意志は失敗や困難に逢うて鍛練したのでなければ、本當に充實した力を發揮することは出来ない。

力ある者は逆境を愉快に感ず。

——(實業之世界)——

逆境といひ、順境といひ、人の心得一つで直ちに地位を變換する。逆境で奮發すれば順境になることが出来る。順境だといつて安心してゐれば、又逆境に落ちないとも限らない。

順境 必ずしも美やむべきではない。奢る平氏は久しからずである。逆境 必ずしも悲觀すべきではない。逆境を苦しいと感ずるのは力のない者である。意志の弱い者である。力のある人は逆境に立つたのを、その力の振ひどころとして却つて愉快とすべきである。山中鹿之助が『憂きことの尙この上につもれかし限りある身の力ためさん』と歌つたのは此の逆境に於て愉快を感じ

てるのである。

順境だからと云つて、それで満足して修養を怠つたり努力を忘れる者は、決してその順境を續けて行くことは出来ない。出来たとしてもそれ以上の發展は覺束ない。順境むしろ呪ふ可きではないか。然し、順境にあつて怠らずつとめる者はエライ。

本當に力のある者はトン／＼拍子の順境では何もなく物足りない。困難に困難を重ねてその間に悠々迫らざる所がある。自分の力をためすのである。逆境を樂しむのである。逆境の恩寵と云ふことが頻りに言はれたが、苦しい境遇にゐて尙天地の恩寵を味はふのである。かくの如くんば逆境必ずしも逆境ではない。自からの力を信する者は斯くあるべきである。さうして大

事大業を成し遂げるのである。

要するに逆境を苦としないものには逆境も云ふやうな者はない。順境だといつても、順境を守ることが知らず、順境をたのしむことを知らぬ者には順境と云ふものはない。順逆、何れにしろ、人間の見やう一つである。考へやう一つである。一切無差別である。

心得の確な者には得意失意の別はない。

——(日本及日本人)——

心得のたしかな者には得意時代とか失意時代とか云ふ區別はない。如何なる場合にも得意にはならぬ。如何なる困難失敗に逢つても失意にならぬ。他から見て得意失意と察すべき時があるかもしれぬが、當人自から得意になつ

たり失意になつたりするのでは、餘り前途に望みはない。

喜怒哀樂と云ふことがある。嬉しい時には嬉しく、悲しい時には悲しむ。それは人として普通のことである。得意と失意とはちがふ、自分の思ひが叶つたから喜び、叶はぬから悲しむのはよい。然し、思ひが叶つたからといふて得意になるのはよくない。満足顔に誇るのはよくない。思つたことが通らぬと云つて、失望落膽してしまつて、殆んど仕事に手がつかぬと云ふのではいけない。さう云ふ人は餘り心得の確かな人とは言へない。前途有爲な人物として稱するには足らぬ。

思ふに一生は長い。ある時思ふやうになつて得意になつて終つては、その先々で遭遇する出来事をどうしやう。ある時、失敗したからとて、それで忽

ち悲觀して失望してしまつては、この先多くの事件をどう處理して行くか、いやしくも將來のある者は決して得意になり失意になるべきでない。人は多く得意になつて失敗し、失意になつて元氣が喪失してより以上の發展はむづかしい。得意失意は將來に希望を有する者の慎しまねばならぬ所である。

一生の大志を抱くものは小成に得意になるな、一敗に失意になるな、喜ぶべき時には喜べ、悲しむべき時には悲しめ、然し人間の一生を通じて得意の時失意の時なきと云つて閑暇はない。不斷の努力である。不斷の突進である。淺薄なものは得意になり、意氣地のない者は失意になる。確かりした意志を抱いてる者はいつでも同じ心持ちで仕事をする。

職業難は寧ろ社會の進歩を促す。

職業難は處世難である。生活難である。生活難の聲の絶えないのは、食へないと云ふのではなく、高い程度の生活がなし難い云ふのではあるまいか。低い程度の生活をしてゐれば困難のあるべき筈がない。何れにしても生活難は食ふに困るのではなくつて、よく暮せと云ふ問題である。

食へぬと云ふことはない。そんな意氣地のないことはない。少しでもよく生活して行きたいから、いろ／＼の困難がある。思ふやうに行かぬ。そこで處世難云ふことになり、職業難と云ふことになるのである。然し、これは結構である。唯食ふてるだけならば犬でも猫でもよくやつてゐる。人間たゞ食ふだけでは犬猫と區別はない。それでは困る。或は物質的に美衣美食を得

やうとする。或は精神的に智識思想を修養しやうとする。茲に於て社會が進歩し發達して來るのだ。

困つた者は、時の世にも何所にでもゐた。決して新しい言で ない。昔は人口が少ないかはりに土地もひらけなかつた。今は人口も多くなつたが土地も澤山開けて來た。段々にさうなつたので急に始まつたのではない。思ふに人智が拓けて、より以上の生活を望むから、土地が開けたとけで足りず、機械が發明され、宗教が傳えられ、教育が普及し、自然従つて社會が進歩して來たのである。實際、今の世の中は何所を見ても人が満ちてゐて中々よい職業が得難い。得難い職業を得るには何程か勉強しなければならぬ。或は又新たなる事業を企てなければならぬ。社會に個人々々の必要に應じて一歩一

歩進歩の域に達する。

世の中は中々思ふようになる者ではない。樂に通れる者ではない。思ふやうにならぬから骨も折る。樂に通れぬから苦勞もする。それで進歩する。世の中のことが、人の思ふ通りになつたら進歩は止つてしまふに異ひないと思ふのである。

一身一家の爲にのみ盡す者は世間が狭い。

——(日本及日本人)——

自分の一身上のことばかり心配してゐる者はたえず一身一家のことを思ふてゐる。贅澤をしても世間が狭い。高位高官に昇つても面白くはあるまいと思ふ。儲けた金を損をしないやうにクヨク考へたり、折角得た地位を離れ

まいとしたり、金があつても、位が高くて、自分のことばかり思つて暮すのだから甚だ世間が狭いばかりでなく、不安なく日を送ると云ふことは無いだから一朝財産を失うとか、免官退職などになると、身も世もあらぬやうに悲觀する面白くないところである。

然し、人の爲にするとか、社會のために盡すとか、己れより外に目を配るものは、己れの身にふりかゝる利害を感ずることが餘り痛切でない。胸中に何さなくゆつたりした所がある。落ちついた所がある。貧賤に處しても、陋巷にゐても、綽々として餘裕のある安らかな生活をしてみられる。

日本でも、支那でも、歐米でも、古來、財産家、政治家は少くはなかつたらう。けれども、それだけ人の記憶に残つてゐるか生きて死んだ、犬や猫と何

の選ぶ所もなく終えた者が澤山にある。然も、十字架上にハリツケにされた基督、名は今も尙世界の信仰を博してゐる。志を六國の間に得ずして窮死した孔子は千萬世の後、尙、道の師と仰がれてゐるではないか、自分のためにするのと、人のため社會のためにするのと、それだけの相異である。

中江藤樹の名は兒童も知つてゐるが、當時の諸大名の内。果して誰か今日まで名を傳えられる者があらう。

我々が基督たり、孔子たり、藤樹たりえることはむづかしい、運動會にも百メートルの勝者もあれば、五百メートル、千メートルの競走に勝つるもある。各その宜敷に従ふべしである。各分に應じ、社會國家のため、盡すべきである。自分一身のためのみを考へるのは卑しむべきである。

昭和二年十月十八日印刷
昭和二年十月廿一日發行

三宅雪嶺格言全集
(定價壹圓貳拾錢也)

版權
複製
不許
所有

著者 藤田信亮
編輯者 佐伯光俊
發行者 東京市小石川區指ヶ谷町七番地
印刷者 東京市下谷區池ノ端七軒町三十七番地
印刷所 東京市下谷區池ノ端七軒町三十七番地
二喜堂印刷所

發行所

東京市小石川區
指ヶ谷町七番地

有宏社

電話小石川(85)五七五番
振替口座東京七四五〇五番

終